



ICT 海外ボランティア会会報

No. 54 **新春特集号**

2015年1月1日(木)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : sv@info.ictov.org

目次

- ◆ 新春巻頭言
六十過ぎたら源氏物語を!
ICT 海外ボランティア会特別顧問
元駐ケニア大使 宮村 智氏
- ◆ 新春特別寄稿
「電友会ボランティア活動賞」の団体賞を受賞して
ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏
- ◆ 新春寄稿
「電友会ボランティア活動賞」表彰式に参加して
ICT 海外ボランティア会事務局長 加藤 隆氏
- ◆ 海外グラフィティ
「三文オペラ」の世界
日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏
- ◆ 技術協力の思い出 (10)
Smart Communication プロジェクトの経緯
株式会社光通信 顧問 鈴木 武人氏
- ◆ 第 11 回 海外情報談話会開催模様 事務局
- ◆ 第 12 回海外情報懇談会開催のお知らせ 事務局



新春巻頭言

六十過ぎたら源氏物語を！

ICT 海外ボランティア会特別顧問 元駐ケニア大使

宮村 智

ICT 海外ボランティア会の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。

当会は昨年 11 月、電友会ボランティア活動賞を受賞しました。こうした立派な賞に輝いたのは石井顧問・加藤事務局長・村上報道部長など当会の設立・運営を主導されてきた方々のご尽力とそれを支える会員の皆様のご理解とご協力の賜物であります。心から敬意を表するとともに、今回の受賞を機に当会が一層発展するよう祈念いたします。

さて、今回は会員の多くが 60 歳以上であることに鑑み、源氏物語を取り上げて講読をお勧めすることにしました。私自身は 62 歳の時に誘いを受けて、高校同級生である男女 3 名ずつ計 6 名からなる「源氏倶楽部」と称する源氏物語の講読会に参加し、2009 年 1 月から 2 年間かけて源氏物語を原文で読みました。講読会は、①予め各月に読む部分を決め、その部分を各自が予習してくる、②その上で、毎月 1 回集合し、輪番制の当番が自分の好きな箇所を読み上げ、解説を施す、③その後、自由に意見や感想を述べ合うなどして、2 時間程度で終了する、というやり方で進められました。

源氏物語の原文を読むのはとても難しく、慣れるまでは随分と予習に時間がかかりました。しかしながら、内容が面白かったのと仲間がいたために、それなりに楽しく最後まで読み通すことができました。一度は読んでみたかった源氏物語を完読することができ、本当に良かったと思っています。完読して源氏物語は本当に素晴らしい作品であり、源氏物語こそ日本が世界に誇れる最大の文化遺産であろうと感じました。



(2010.12 完読を祝って乾杯！)

一言で片付ければ、「光源氏と多数の女君が織り成す愛憎ドラマ」である源氏物語が何故そんなに素晴らしいのか。識者が指摘し、私も同感する主な理由を挙げれば次のとおりです。

第1に、登場人物がそれぞれに個性的で魅力的なことです。主人公の光源氏は高い身分、光り輝く美しい容貌、豊かな才能と教養など、あらゆる面で恵まれたスーパースターです。彼はまた非常に大らかでスケールが大きい人物であり、女君と一度でも関係を持てば一生世話をしようとする責任感も有しています。光源氏の相手となる多数の女君は生い立ち、境遇、性格、考え方などがそれぞれ異なりますが、個性的で魅力溢れる女君が揃っています。

第2に、筋立てが巧みで面白く、語り口も上手なので、わくわくドキドキしながら、楽しく読み進められることです。また、登場人物の心理描写が細やかなので、近代小説を読むように内容の深さや濃さを味わうことができます。

第3に、平安時代の百科事典と言われるほど、政治・経済・社会から宗教・文化・芸術・風俗習慣まであらゆる事柄について触れられている上、当時の男女間の重要な意思疎通の手段であった和歌が795首も織り込まれているので、源氏物語を色々な角度から読むことができます。

こんなにも素晴らしく、既に20以上の外国語に翻訳されて海外でも評価が高い源氏物語ですが、実際に読んだ日本人はそう多くないと言われていています。誰もが源氏物語の存在は知っているし、読みたいと思っている人も少なくないのに、どうして実際に読んだ人は少ないのか。その理由は次のようなハードルがあるからと考えられます。ハードルの第1は源氏物語が100万字、原稿用紙換算で2,500枚と長い上に、登場人物も430人以上と話が複雑なことです。第2は原文が天皇の妃のサロンにおける読み上げ用に書き下ろされたもので、一文が長い上にほとんどの主語が省略されているため、読むのがとても難しいことです。第3は光源氏のように多数の女性を相手にするドンファンが主人公で、不倫関係も珍しくない話には嫌悪感や抵抗感を持つ人も少なくないことです。



(2010.12 源氏完読記念旅行 大津・石山)

しかしながら、こうしたハードルは多くの人にとって60歳を過ぎると相当低くなります。第1と第2のハードルはつきつめれば時間的制約ですから、退職や転職によって時間的な余裕が出てきたら、クリアしやすくなります。第3のハードルについても、歳を取れば、考え方がより柔軟になり、平安時代には一夫多妻制の方が多くの女性の生活保障にとって有効で合理的だったことが分かるようになると思います。他方で、60歳を過ぎる世の中の仕組みや男女の仲を含めた人間関係の機微について理解が深まり、花鳥風月にも関心を抱くようになるので、源氏物語の面白さや素晴らしさが一層分かるようになって、心の底から源氏物語を

楽しめるようになります。これらが60歳を過ぎたら源氏物語を講読されることをお勧めする理由です。

講読にあたっては、原文を独りで読み通すのは相当難しいので、源氏倶楽部のような講読会とか講師付きの講読ゼミに参加して、仲間と励まし合い刺激し合いながら、楽しんで読み進むのが良い方法だと思います。仲間がいると誰かが読み上げたのを耳で聴くという源氏物語本来の味わい方を楽しめます。また、源氏物語を題材に知的作業や遊びもできます。私共は源氏物語の各帖における名場面を選んだり、好きな和歌2句を選んで源氏百首を作ったりしました。

講読会の最後には源氏物語の登場人物141人を現代の俳優が演じる配役表作ることにし、喧々諤々と盛り上がった議論をしました。そして、講読会が終了直後の2010年12月には6人の仲間と「源氏物語完読記念旅行」に出掛け、宇治・大津・京都の源氏物語ゆかりの地を訪問し、楽しい思い出を作りました。60歳を過ぎたら、きっとこうした講読会の仲間を募ることも容易になるのではないのでしょうか。それでも、講読仲間を探すのが難しい場合は、原文でなくて、現代語訳を読んでも十分に面白いと思います。海外ボランティアとして赴任する際に、荷物の中に与謝野晶子や瀬戸内寂聴訳の源氏物語を入れておくと趣味が良い人だと評判になるのではないのでしょうか。

以上、いろいろと書いてきましたが、実は「六十過ぎたら源氏物語」というのは高校時代からの友人であるK氏の主張で、私は彼の主張に全面的に賛同し、彼の了解を得て、この巻頭言を書いている次第です。K氏は大手商社で活躍した国際的なビジネスマンだったのですが、60歳近くになって日本の古典に興味を持ち始め、いくつかの古典を読んだ後、仲間呼び掛けて源氏倶楽部を作り、同倶楽部の実質的な幹事役を務めてくれました。そして、源氏



(2014.12 ブログ完了記念旅行 嵯峨野・野宮神)

物語を完読した後も、引続き源氏物語の研究を続け、2012年7月には「源氏物語道しるべ」と題するブログ (<http://sassa.kuri3.net/>) を開設しました。そのブログも昨年9月に終了し、12月にはK氏と私を含めたブログのコメント役7人の計8人でブログ完了の旅に出掛け、宇治、京都、奈良の源氏物語ゆかりの地を訪ねて来たところです。

最後にK氏自身が情熱を込めて源氏物語の講読を勧めるメッセージを紹介して、本稿を終えたいと存じます。「六十過ぎて世の中のこと概ね分かり、精神的にも余裕が出てきたら

絶対に源氏物語です。お金はかからない、時間はかかる、知的満足感は得られる、言うこと
ないじゃありませんか。究極の文化体験、源氏物語の世界に是非！！」 (了)



新春特別寄稿

「電友会ボランティア活動賞」の団体賞を受賞して

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

「ICT 海外ボランティア会」が思いもかけず団体賞を頂くことが出来、年甲斐もなく久しぶりに心浮き立つ気分になりました。推薦を下された日比谷同友会幹部の皆様、そして評価を下された電友会幹部の皆様方に心から御礼申し上げます。また、情熱と無私・無償の精神でこの活動を支え続けて居られる加藤隆さん(事務局長)、村上勝臣さん(報道部長)、山崎義行さん(広報部長)をはじめとする同志の皆さんに感謝申し上げます。

のっけから私事になり恐縮ですが、現役当時の仕事は全くドメスティックで、海外に関しては全く縁がありませんでした。俄かに現役を離れることになり、身体の真ん中にポッカリと大きな風穴があいたような精神状態になりましたが、この穴を塞ぐには、何か今までやった事のないものにチャレンジするしかないか、と思ったものです。当時の上司であった澤田さんや児島さんの激励もあり、JICA のシニア海外ボランティアに応募し、現役時代に経験出来なかった海外での仕事にトライしました。

中進的途上国であるタイに赴任し、周り中が全てタイ人で、文字通り一兵卒の状態に戻り、多角的な技術支援に取り組んでおりますと、余計な纏いが取れ物事の実相が素直に見える感じになりました。そうした中で、本ボランティア活動の切っ掛けとなった事柄を挙げてみますと、

- (1) 電気通信分野において、公社時代から NTT はタイに対しかなりの技術支援と援助を行って来たものと自負して居りましたが、当時の状況は、NTT はおろか日本 IT メーカーのプレゼンスすらも極めて希薄であること。
- (2) 途上国の諸君は懸命に先進国に追いつくべく勉強をして居るが、如何にも上滑りで、基礎・基盤(インフラを含め)が大変脆弱であること。
- (3) 上記のような問題点を丁寧に説明し、理解してもらい、地道でまともな開発軌道に乗せるような仕事(工程)が必要不可欠であります。このような任務は我々

のような技術や業務のポイントをわきまえ、且つプランニングやマネジメントなどの経験を有するシニアが打って付けであること。

- (4) 昨今の時流の中で、途上国においても官営から民営への流れが急速に進行しており、こうした中での支援活動には、真藤イズムをバックボーンとした電電民営化経験が極めて有効であること。

等などで、これは何とかしなければと思いました。

細かい経緯は割愛しますが、以上のような想いを、シニア海外ボランティア経験をお持ちの加藤隆さんと百パーセント共有し、意気投合しました。そして、新しい時代に適った途上国に対する支援活動を考え、実行に移す手立てを模索してみようと立ち上げたのが、「ICT海外ボランティア会」であります。

我々の問題意識は凡そ次のような所です。

- (1) 我が国のみならず相手途上国の真の国益を考え、短期的ではなく、中長期的な支援に結び付けるには何を如何したらよいか。
- (2) 高齢化社会に向かう我が国の現状に鑑み、シニア世代の生きがいにつながる仕事を途上国支援の中に見出し、これを積極的に生かせないか。
- (3) とは言っても限られたシニア層だけでは限界があり、実行・実現には広い層に亘る方々の理解と協力が必須であるので、世間に対しこうした事についての問題提起を行う必要がある。
- (4) 一人でも多くのシニアの皆さんに「シニア海外ボランティア」を体験してもらい、途上国支援の実態と意義を実感していただく。

何はともあれ歩き始め、歩きながら色々考えて行こうと云う事でスタートし、NTT-OBを中心に広く会員を募り、ネット上で定期的に発行する会報（メルマガ形式）を会員相互のコミュニケーションのツール（場）と致しました。

会報の内容は、識者の方々のご意見の紹介、真藤イズムの分析（「真藤語録」による）、JICA シニア海外ボランティア要請情報の紹介、海外でボランティア活動を行って居る方や嘗て活動された方々の活動報告など、活動に対するスタンス（気構え）といったものから実践に至るまでを全般的にカバーするよう試みて居ります。また、誌上を通し、現在活動をされて居る方々に対するサポートなども試行して居ります。

一昨年からは、加藤さんの提案で、お互いに顔の見える議論をしようという事になり、広い見地から様々の関連する問題についてフェイスツーフェイスの意見交換を行う「海外情報談話会」を IFIS 様と共に創り、有志による賑やかな議論を始めて居ります。

なお、談話会の会場につきまして、無償でご提供下さって居る工事協会様並びに JTEC 様に厚く御礼申し上げます。

会報の発行、ホームページ (<http://www.ictov.jp/>) の運用、談話会の開催等の会運営は、冒頭のお三方が中心になり、専ら、ボランティア精神で実施されて居ります。

我々の活動は如何にも茫洋としたもので、ちょっとやそつとで、成果がでるものではない事は十分承知して居ります。「年寄りの冷水」などと言われそうですが、何かやらねばという想いと、「小さなことを積み重ねることが、とんでもないところへ行くただ一つの道」と云うイチローの言葉を頼りに、時折初心にたち還りながら試行錯誤を続ける積りで居ります。

翻ってみますと、我々は日本の高度成長期の中で仕事が出来た幸運に恵まれました。毎日が仕事、仕事。無趣味が趣味とか、仕事に興味などと粋がって明け暮れて居りました。ところが定年を迎え、いざ仕事から離れますと何をしたいか分からない。勿論、高尚な趣味を満喫されて居る方々が多いことは存じて居りますが、どちらかといえば無趣味派が多数を占めているのではないかと思います。（私もその一人です）こうした者にとって、身体の方の発散は、毎日の散歩などで比較的容易に解決出来ます。しかし、心と言いますか魂の発散（気晴らし）は、そう簡単ではありません。そこで提案ですが、私どもの会報や談話会を利用頂き、かねがね思い抱いている事やこれは問題であると思っている事などについて、会報へ寄稿するなり、談話会の講師として話すなどして皆でディスカスする。これは、かなりコクのある気晴らしになる事、請け合いです。（恐れ入りますが稿料、講演料は無料をお願いします）我々の活動が、こうした「心の散歩道」になれないものか、とも思っています。

OB 主体の活動では現役の場合とは異なり、先にも触れましたが、明確な結論を出して実行に結びつけることは中々困難です。反面、フリーに遠慮なくものが言え、勝手な提言等が自由にできるメリットがあります。些かでも世の為になればと心懸けながら、肩に力を入れず、時には息抜きなどもまじえ、愉快地にやって参りたいと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。

新春寄稿

「電友会本部ボランティア活動団体賞」表彰式に参加して

ICT 海外ボランティア会事務局長 加藤 隆

去る11月27日、五反田「ゆうほうと」で開催された電友会ボランティア活動賞表彰式に参加しましたので、その様子を報告いたします。

この表彰は「趣味・資格・特技などを活かした活動、福祉活動、環境美化を推進した活動など多様で幅広い奉仕活動を長年に亘り積極的に続けた功績」に対して毎年行なわれるもので、今回は24回目になり、全国から36の個人・団体（個人30、団体6）の表彰で、そのうち11名が女性でした。受賞者の具体的な活動はスポーツを通じた少年指導、特養ホーム等への福祉活動や地域活性化活動など優れたものです。国際活動関連では当会のみです。電友会は全国14のNTT退職者による地方本部を束ねる組織で本社地方本部（日比谷同友会）からは当会を含め3件が表彰の対象でした。

式典は鈴木正誠会長のご挨拶に始まり、来賓挨拶に引き続き、会長から一人一人に授与が



ありました。式は厳粛で且つ和やかでもありました。当会に対する団体表彰状の文面は「あなたがたは長きにわたり発展途上国の情報通信システムの向上などの活動に尽力されました。その功績は誠に顕著でありますのでここに表彰いたします」という有り難いものです。

式終了後記念写真撮影がありました。

引き続き行なわれた懇親会ではNTT 三浦会長の挨拶がありました。その中で「NTTは現在海外進出を計っていて、社員24万人の内7万人が外国人です。それに呼応してか、今回の受賞者にも海外関係が入っていることは、時代の反映もあろうが意義深い。」と話されました。

当会を表彰対象として推薦いただいた日比谷同友会からは宇治則孝会長が参列され、種々ご配慮をいただきました。そしてこのような活動を基に日比谷同友会会員増に結びつけたいので尽力いただきたいとの意向を話されました。日頃当会活動に深いご理解と励ましをいただいている鈴木会長（前日比谷同友会会長）からも沢山の祝い言葉をいただきました。また懇親会では日頃ボランティア活動を通して腕を磨いている尺八演奏や日本舞踊の披露もあり、大いに盛り上がり且つ和やかでした。

ここで表彰の対象になった当 ICT 海外ボランティア会の歩みを簡単に振り返ってみます。ことの始まりは、1999年 石井 孝氏（当会顧問）が JICA のシニア海外ボランティア（SV）としてタイで人材育成に当たられたことです。その後同様の経験をした私と相計らい2008年に「NTTOB ボランティア会」として細々と発足しました。そして宮村 智氏（元ケニア大使）を特別顧問としてお迎えしたことや石井氏の大局的且つ具体的ご指導が飛躍の礎になりました。そしてうれしいことには、NTTOB のみならず NTT の現職の方々及び NTT 以外の方

の入会が相次ぎました。それで2010年に現在の「ICT 海外ボランティア会」と名称を変更し、活動内容も拡げました。

ホームページについては、山崎義行氏（広報部長）のお陰で立派なものが出来、現在では日々約150名、現在まで延13万人の来訪者があります。これは別途発行している会報を収録するなどアーカイブの役割も果たしています。

また会報（「ICT 海外ボランティア会会報」）は、JICAのシニア海外ボランティア（SV）募集などのニュース中心の初歩的なスタイルで、インターネットによる配信でスタートしました。その後、村上勝臣氏（報道部長）が編集に加わり、内容も巻頭言、エッセイ、活躍中SVや青年海外協力隊員による現地だより等々幅広いものになり、今号は54号を数え、毎号約600名の方々に配信しています。

この間トンガ王国でプロジェクトを発掘し、そのモデルシステムを構築しました。それはSVとしてトンガ政府に派遣された鈴木弘道氏の活躍により、同国が自然災害に悩まされている現状を打開すべく、国内から山下満男氏（派遣者支援部長）や内山鈴夫氏の支援を得てAPT（アジア太平洋電気通信共同体）より「ICTを用いた災害対策システムプロジェクト」を受注し2年がかりで完成しました。これはJTEC（海外通信・放送コンサルティング協力）、BHN支援協議会、日本無線（株）の合同チームにより推進されました。

また海外情報談話会を開始しました。これは、グローバル化真只中、何事においても海外に関心を持つことが必要です。同時に海外人材育成等を通してわが国産業の国際競争力強化も喫緊の課題です。この談話会はその第一歩となるべく、情報や意見交換の場を提供いたします。話題は広範囲なものとし、毎回講師より話題を提供していただき、それを基に活発な意見交換がなされています。既に12回実施されました。ご参加をお待ちいたしております。

当会の特徴の一つは、会費はなく、談話会参加も無料です。従って会報へのご寄稿や講演の謝礼はなく、全てボランティアで運営されていることです。

海外クラフティ

「三文オペラ」の世界

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智



「三文オペラ」を新国立劇場で見たが、とにかく、劇の持つ魔力に魅せられた。時代を超えて人に訴えるものは古今東西同じだ。ブレヒトが秘書兼愛人だったエリーザベート・ハウプトマンの「The Beggar's Opera」のドイツ語訳を読んで執筆したのがこの三文オペラ（DIE DREI GROSCHEN OPER）でドイツ初演が1924年、爾来、世界中

で爆発的人気となり、今でもそれは続いている。

ジョン・ゲイ原案の The Beggar's Opera は、1728年にロンドンで初演されたが、成功をおさめ、200年後の1920年にリバイバル上演されたが、これまた大成功。そこに抜け目のないブレヒトが目をつけたというわけである。

舞台は産業革命真っ只中の19世紀・ロンドンの貧民街であるソーホー。都市人口も激増した時代。ごく簡単にあらすじを述べると「稀代のプレーボーイで大泥棒のメッキースは、たまたま知り合った少女ポリーを見初めその日のうちに結婚式を挙げる。ところが、このポリーはというと、乞食の総元締めビーチャムの娘だった。ポリーは様々なまともな男に言い寄られても拒否してきたが、この女たらしにはころりと参ってしまった。ビーチャムとその妻シーリアは大慌て、手塩にかけてきた生娘をいとも簡単に盗まれて、何とか別れさせようとする。そのため、メッキースの悪事をメッキースの戦友にして親友・警視総監ブラウンに直訴し、メッキースを逮捕させようとする。結局、メッキースの愛人の一人である娼婦ジェニーの裏切りなどで逮捕され、一度は脱獄に成功するも最後には絞首刑になりそうになる。ところが、突然、戴冠式を終えた女王の恩赦で、年金1万ポンドと城まで与えられるという大ハッピーエンド」。

筋そのものは、他愛ないが、人間の業を鋭くついて、セリフが小気味いい。例えば次の言い回しは余りにも心にグサッとこないだろうか？

谷川道子訳・光文社文庫「三文オペラ」によれば、

「愉しい暮らしのバラード」
俺だって 偉くて孤高な人物に
なりたい気持ちはよくわかる
でもそういう連中を間近に見りゃ
とてもたまらないって 思うのさ
貧しさは 英知と一緒に不愉快を
勇敢さは 名誉と一緒に労苦をもたらす
貧しく孤高で 聡明で勇敢
そんな偉い人間になるのは やめたがいいさ
すると 幸福の問題はすぐに片が付く
裕福な者だけが 愉しく暮らすのさ

音楽はクルト・ヴァイル。ちょうどクラシックから現代音楽の狭間の時期で、ジャズからタンゴ、賛美歌まで駆使している。有名な「マック・ザ・ナイフ」が出てくる、1955年レイ・アームストロングのヒットで一躍世界的に流行した。文字通り主人公のあだ名そのもので「ドスのメッキース」。「殺しのバラード」はそれを物語る。

人食い鮫は するどい歯を
面いっぱい むき出している
だがメッキースは 自分のドスを
決して誰にも見せやしねえ

この劇はどのジャンルに属するのだろうか？通常「音楽劇」としているが、これをミュージカルやオペラと称している人々もいる。しかし、オペラというには軽すぎる、オペレッタなら納得できるが。ヴァイルの音楽とブレヒトの脚本の組み合わせがこの劇を他と差別化している。翻訳を手がけた谷川道子自身が「解説」のなかで述べている。

「ドイツ文学史のなかで『レジェンド』というなら『ファウスト』、『ミラクル』といえど『三文オペラ』だろうか。偶然が必然へとひっくり返って、時代精神にピッタリはまった」。

時代精神にはまったこの音楽劇だが、全編を貫くものは、普遍である。すなわち、人間の持つ3つのファクター、金と色と欲に尽きる。作者のブレヒト自身がプレイボーイで、若いころ、いい女には声を掛けまくっていたらしい。ブレヒトも「人間を動かしているのは、食欲、性欲、知識欲だ」と言っている。純文学などでは、ほのかにあるいはオブラートに包んでさりげなく「欲望」が表現されるが、この作品では、ごくストレートに、むき出しに描かれている。しかし、なぜか後味は悪くない。なぜだろうか？そして、一見に値する劇であることに間違いはない。

技術協力の思い出（10）

Smart Communication プロジェクトの経緯

株式会社光通信顧問 鈴木武人

プロジェクトの目的： 1990年代、通信の自由化・買収が進む中、日本の国際競争上 NTT も国際通信分野へ進出すべきという声が政界トップからありました。そのためには NTT 法の改定が必要で、何より実績を作らなければならないとされ、1995年4月、セルラ・国際等の通信事業の免許を得たばかりの Smart 社に出資し、免許条件として負った70万回線の固定網構築のため NTT の海外勤務経験のある13人を率いて赴任しました。しかしながら、現地の状況を学び、政治家や政府から理解を得て、携帯通信と固定通信を融合させたユニークな網として投資を経済化、また携帯も後発であった事から競争の無い地方部に初めて展開、さらに当時常識外のプリペイドに集中し、購入されたプリペイド価値（エアertime）を網経由で送受する等ユニークな機能を盛り込み、結果的に Smart 社を第一位の携帯会社に発展させる事が出来ました。Smart 社は世界で最初にデータ収入が音声収入を上回った通信会社で、国の内外からの決済・銀行口座へのアクセスも提供、これらは現在南米やアフリカ等でも用いられ、急激な普及を見せています。

フィリピンの通信の状況： 戦後華僑のコファンコ家（アキノ大統領の実家）が支配的な通信会社として PLDT を経営し、また地方都市は日本・イタリア・カナダの支援による公社の他、数十の電話民営電話会社がありました。PLDT は利益重視から、地方へのサービスを怠り、

また大都市部においても一部の従業員がプレミアム(裏金)をとって開通する状態で、結果フィリピンへの投資・進出を計画する企業にとっての障害として通信があげられていました。この状況の変革のため、ラモス政権は利益の得易い携帯、国際の免許を新たに発行、その付与条件に外国資本の参加、また固定電話の敷設義務を課すという政策をとったのです。

Smart Communication の事： ラモス大統領の通信自由化政策で、固定網も同じエリアに複数の通信会社が存在する競争状態が作られました。新政策の基で既にシンガポールテレコムの出資を受けた Globe Telecom, ドイツテレコムと地元海運会社を株主とする Islacom の 2 社が GSM を提供、また PLDT 傘下の Piltel も対抗上米国方式アナログ AMPS からデジタル CDMA 方式の導入を図って迎え討つ体制を構えていました。この状況で Smart 社は Doy Vea と David Fernando という二人が資金を集めて会社を設立したベンチャ企業でした。当時はマニラ首都圏の一角でアナログ携帯 (ETAX, 900MHz) 方式構築を開始したものの資金ショートしてインドネシアのサリム傘下の香港 FPC(CEO は Manuel Pangilinan 氏)に融資を求めておりました。FPC の子会社から中古設備も購入して 2 万加入を確保したものの赤字、また GSM 用電波も 2GHz 帯で 5MHz という狭帯域しか割当を受けていなかったのもデジタル (GSM) への移行が難しく、さらに 70 万回線の固定網の敷設義務(1,500~3,000 億円規模)を負った事から金融筋では疑問を持つ方が大勢でした。NTT はこの Smart に 87 億円を 14%の持分として出資し、大歓迎を受けました。

ラモス大統領の記念通話： 赴任直後の 4 月、大統領宮殿で行われた正式調印の際、大統領から約半年後の 11 月に開催される大阪 APEC に出席するので、その場からフィリピンの各地を結んで商用開始記念通話を実施したい旨児島社長に要望されました。当初の固定網計画ではメーカー選定どころか、ネットワーク設備の基本設計も完成していない状況です。

記念通話といっても日本からフィリピン全土へのアクセスを可能としなければなりませんから、その実現にあたっては動員可能な既存資源を活用する他はありません。網構成として既存のセルラ交換機に固定番号も付与し、セルラと共存した論理的な固定網を作成する事としました。勿論、国際(含む KDD)も含めた他通信会社との番号上のインターコネクション (相互接続) も大統領府の協力を得て設定しました。加入者系は FCT (Fixed Wireless Terminal) とし政府機関と大統領の出身地等を中心に展開、また電波の余裕の無いマニラを中心部には別途 NTT International の勧めで、米軍仕様の移動型の交換機を設置する事としました。しかしながら、日本の大手運輸会社は通関手続きに手間取って届かず、別の 2 ルート、即ち NTTI の担当者が持込んでくれた携行荷物扱い、又米国ビジネスメール会社に委託した書類扱いが間に合いました。所が、日本の郵政大臣、大使等の出席を得た大阪会場の大統領からの記念通話時刻直前にマニラ側会場が全面的に停電し、マニラ会場で待っていた運輸通信省のリチャウコ次官が立ち往生する事態がありましたが、僅か数日前に首都圏を襲った世界史上最大級の巨大台風アンジェラ (現地名ロシング) の経験もあって、しっかり準備させた予

備電源で危機を乗切る事ができました。『電力会社 Meralco が意図的に停電させた』との噂がありましたが、同社とはその後も電柱の共架問題や意図的ケーブル切断等から因縁があり、一昨年パンギリナン氏が買収してしまいました。

ベンダー選定： 重要な判断は取締役会の選定したコミッティで図りますが、70 円前後の円高で日系企業が契約で入札出来ず、欧州 3 社を選択、個別協議の末に 2 番札のエリクソンを契約先として先ず 18 万回線を締結しました。この作業には NTT の方々と現地の技術者の良き協力が有りました。

当初エリクソンの働き振りは素晴らしく、主交換機の輸送・通関も予定通りでしたが、景気の上昇時で我々が土地買収に手間取り、搬入時にビルは未だ骨組みだけという事態になってしまいました。外壁も電力も無い中、まるで建設会社の工事現場の様に、骨組みをビニールシートで覆い、可搬型の発電機で空調設備を稼働させ、湿気や埃を排除して交換機の搬入を開始したのです。勿論エリクソン社は猛反対、保証外等主張しましたが、XB ならやらないが、電子交換機はコンピュータと同じだからとなだめて搬入しました。ただ、局外設備の工事についてはプロマネの人選を誤ったか、又同社が我々と競合する Digitel 社からより大きい工事契約を受注したせいか、局外機材や工事稼働の奪い合い等遅滞が著しくなりました。疑心暗鬼状態の中で Smart の職員が出張中の筈のエリクソン社員が秘密裏にリゾートに居るのを見つけて、これを証拠に同本社へ訴えて、人員の入替や設備の入替なども行いました。

計画の大幅見直し： 通信建設がバブル状態で、さらにマスコミがレース中継の様に煽り、各社の網構築が進む中、この国の経済と通信需要について客観的に見てみると

1. 割当サービス地域の人口は 900 万人から 1 千万人と推定され、ここにマーケットシェア 50%を確保するとして、当時の比運輸通信省が想定した国民所得の 1%が通信に消費されるとして Smart 社の地域市場からの収入は最大年間\$45M から\$50M。
2. これに対して、70 万回線を設置したとすると、この\$45M/0.7M から 1 回線あたり年間\$60 から\$70 の収入しか期待されない事となります。
3. 1 回線あたりの創設費を都市部集合住宅相当の費用\$800 程度としても、運用・利子を考慮すれば原価償却費と同等以上が必要とされ、採算には年間\$240 以上の収入が必要。今後の成長を期待しても採算点\$240 の 1/4 程度しか見込めない事になります。実際は更に携帯電話の普及による需要の落ち込みも見込まなければなりません。
4. 従って生き残り策としては、規制上 70 万回線の義務を果たしつつ、回線当たり平均\$2,000 と見積もられた投資額を、\$200 以下に節減しなければならないと結論されます。

固定網の最大問題は競争下で解約されても転用の効かない加入者設備です。そこで WLL (Wireless Local Loop=\$200 程度から)を導入活用する事にしました。技術的に成熟して居なかったのが郵政や NTT からの PHS 導入の要請もあり、PHS の WLL(NEC と Arraycom)

二方式と、遅れた工事の契約枠を使えるエリクソンの DECT を導入しました。WLL であれば携帯のアンテナに併設し、加入者が解約した際には加入者設備を撤去・転用すれば良いのです。この中で驚くほどの効果を示したのが総合商社のニチメンから紹介を受けた。

ArrayCom 社のスマートアンテナでした。この、技術はその後京セラによって Willcom の PHS に導入され、今では GSM の流れを組む 4G の基幹技術の一つとなっています。

幸運にも規制当局(NTC)の長官の背景が統計学であった為、『一切他言無用との条件』は付きましたが、理解を得る事が出来、電波の割当てにも協力してくれました。

地方への展開： マニラ首都圏の南側とルソン島のマニラより北側がサービスエリアです。

首都圏は PLDT 社との競争で、ルソン島北部は Digital 社との競争です。ルソン島北部の経済は東シナ海に沿って伸びており、その中心は Dagupan 市で、その近くにはベトナム戦争時米最大級のクラーク空軍基地やスービック海軍基地跡が巨大な保税特区として発展が期待されていました。米軍撤退の理由はベトナム戦争の終了と 1991 年のピナツボ大噴火とされていますが、その火山灰がラモス大統領による記念通話の直前台風ロッシングによって流れ出し、マニラ湾に至る河川を埋めて大氾濫を起し、数 m の高さで数十 Km にわたり町や畑を覆い、4 階建て程の電話局や教会はそのまま火山灰に埋まって回復の見込みが付かない状況にありました。このような状況で現地の土木責任者が『浮き船型電話局』の提案をしてくれました。これは地下設備を一切作らず、コンクリート土台を浮かして作り、軽いプレハブ局舎に交換設備を入れ、周辺に打ち込んだアンカーとこの土台を鎖で結ぶと言うものです。ラハールで地盤の高さが変わってもこれに合わせて調節できると言うものです。もっとも、その後は大容量交換機の地方展開は止め、集線装置と携帯と共用するマイクロ網による集中型としてリスク回避するようにしました。

NTT 国際通信事業への布石： インテグレーション事業と SNMI の発足

1997 年から NTT の長期戦略を先取りする形で企業通信を担当するグループを Smart 内で発足、当初マイクロウエーブによる専用線の販売を皮切りに事業を開始しました。イメージは NTT データや企業通信本部のような法人用サービスです。日本等から低賃金と持ち前の器用さを求め多くの企業が進出し工場を展開しています。工場の規模は多様ですが、自動車部品の Y 社や電気部品の A 社は数箇所の工場にそれぞれ数万人の職員を抱え、注文住宅建築の会社では日本人だけでも 200 人くらいの規模を誇っていました。設計情報や製品の受発注だけを考えてもその運営には通信需要が高く、さらに通信サービスを提供する側からは、地方展開に必要な無線タワー等の設備設置や電力を得る上でも協力を得られたので非常に好都合なアレンジです。その後、1998 年には既に顧客宅内設備(CPE)事業を開始していた NTT-International の支店も統合し、Smart の傘下に Smart/NTT 夫々 60/40%の合弁会社と

しての SNMI(Smart-NTT Multi Media Inc.)を設立、これが後の PLDT における NTTCom. の Arcstar 事業の受け皿ともなりました。

Smart 社から PLDT : GSM の当初は音質が悪い等評判が悪く、アナログの Smart はその特性から長距離まで到達出来たので特に地方で大きな伸びを示しました。地方では最初のキャリアであったため殆ど独占、また都市部でも地方との通信の多い顧客は Smart を利用してくれるようになりました。しかしながら、GSM の SMS がサービスされるにつれて勢いが変りました。Smart は 2GHz 帯の 5MHz しか割り当てが無かったせいで、GSM のトライアルを行っても自信が持てる様な品質が保てません。したがって、PHS の様に多くのセルサイトを作って対応するほかは有りません。これは固定網の構築経験が生きる分野です。従って、携帯の普及で固定網の需要が下がる中、固定網の部隊は暫時その中心を移すことになりました。900MHz のアナログは地方を中心に併用し、増波を図りながら暫時 GSM へ切替るとともに、市外電話料金の廃止、政治的な SMS の相互接続等にも成功して著しく伸張し、2013 年末には 55.4 百万加入と公表されています。

このプロジェクトはその後、NTT の国際戦略と共に、通信会社間の円滑な相互接続の実現と、高品質なサービスの全国展開を実現するため、全国 6 リンクの基幹ファイバー網等種々のインフラを持つ PLDT 社の買収を実現するに至りました。docomo による PLDT 株買い増し後、年間配当は P200 程で 20.35%(4396.4 万株)を持つ NTT グループはここ数年安定した配当(150~200 億円/年)を得ています。

第 12 回 海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は、去る 12 月 1 日 (月)、 情報通信エンジニアリング協会で開催されまし



た。講師は情報通信総合研究所副主任研究員 佐藤 仁氏で話題は「新たな携帯電話メーカーのメガトレンド：新興国で台頭する新興地場メーカー」でした。

佐藤氏は当懇談会で本年 5 月に引き続き 2 回目の講演で、最新のしかも現地で得られた豊富な情報を基にした講演は示唆に富むものでした。参加者は 24 名で、ホットな質疑応答も繰り広げられました。話題概要は凡そ次ぎのようです。

現代社会はグローバル化が高度に進展しています。グローバル化の特徴は、「世界的な規模での人・物・金・情報の流れ」と「新興国の台頭」です。世界のスマートフォンではサ

ムスンがトップですが、かつてのような勢いはありません。続いて Apple ですが、世界規模でみると、中国メーカーの台頭が非常に著しいです。また新興国でもスマートフォンが急速に普及してきました。それを加速させているのが、地場のメーカーの台頭です。

Apple は新種の iPhone を発売しましたが、人気があるのは日本やアメリカのような先進国市場だけです。そして期待されていたソニーは日本市場での存在感はまだ高いですが、世界規模でみると不調が続いています。

新興国では、プリペイド市場と中古端末市場が圧倒的です。メッセージングアプリが大人気で、多くの若者らが Wi-Fi で利用しています。コンビニなどでは無料または安価で Wi-Fi 接続が可能です。そのためメッセージングアプリの顧客獲得競争が激化しています。Wi-Fi は急速に拡大していますが 3G は進んでいない。また東南アジアではスマートフォンやデジカメで自撮するための棒、通称「セルフィー (Selfie)」が大人気で、若者らの新たなアイテムとして存在感を高めています。



第 13 回海外情報談話会開催のお知らせ

事務局

ICT 海外ボランティア会 協賛情報通信国際交流会

日 時：平成 27 年 1 月 30 日（金） 午後 3 時～5 時

場 所： 情報通信エンジニアリング協会

（渋谷駅下車徒歩 10 分、道順は同協会のホームページをご覧ください）

今回は場所が変わっており、JTEC ではありません。

話 題：「電電公社クウエイトコンサルティング業務の意義」

講 師： 講 師：（元）電電公社建築局設計課長

（元）NTT 建築総合研究所代表取締役副社長 松本文郎氏

話題概要： 1965 年から約 10 年間におよぶクウエイトコンサルタント業務は、技師長だった佐々木卓夫氏がわが国電気通信産業の海外展開への想いをこめて結実した双務（役務／報酬）契約に基づく、公社発足後間もなく始まった「海外技術協力」とは一線を画したものである。

1957 年にスタートした ODA は、“わが国の経済発展と国民の繁栄を図る見地”から供与する国益の視点に立ち、公社「海外技術協力」の“開発途上国の経済格差是正や当事国民の繁栄と平和に寄与する観点とは、対照的なものだった。

クウエイトコンサルタント事務所・建築班チーフとして、1970年から4年間在勤した私は、エジプト国策建設業者やしたたかなレバノンのゼネコンとの緊張関係のなかで、所員一同と現地採用のイラク・インド人建設技術スタッフらと、熱砂の地で苦労を共にした。

長年、赤字続きのプロジェクトの意義が公社外から高く評価されたのは、1973年のオイルショックでクウエイトを訪問した使節団（三木武夫特使、大来佐武郎海外経済協力基金総裁ほか）へ、わが国の国際協力の在り方について若気の至りの“直言”したのが、いささかのキッカケになったかと自負している。（松本文郎氏）

参 加： 入場無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp までご一報下さい

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集担当 加藤 隆 (kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) , または

村上勝臣 (katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp) までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 本年最初の巻頭言は例年にならい宮村 智さんよりいただきました。新春に相応しく「源氏物語」読破の紹介です。難解ではありますが、私の世代には特に興味がそそられます。先日若い米国人と話をする機会がありましたが、これは米国でも日本の理解を深める良い教材とのことでした。
- ・ 当会のボランティア活動への受賞を機に、顧問の石井 孝さんから当会活動への思いを綴っていただきました。宮村様、石井様の高く・広く且つ将来を見据えたご指導と共に、日頃の会員の皆様の暖かい励まし対し、感謝の意を表させていただきます。この活動が、皆様に認知され、しかも期待をもって注目されつつあることを感じ、新たな年を契機に一層励みたいと感じております。
- ・ 今回の技術協力の思い出は、フィリッピンで活躍された鈴木武人さんからいただきました。NTTがPLDTに進出した経緯を含め貴重な記録です。また第11回の海外情報談話会は情報通信総合研究所の佐藤 仁さんより、今グローバル的に花形であり、そして大きなうねりを見せる携帯電話の動向に付いての講話は興味深いものがありました。第12回には幾多の海外人材育成と、海外ビジネスのノウハウ蓄積に寄与したクウエイト プロジェクトについて松本文朗様のご講話があり楽しみです。

(以上 加藤)

- ・ 会報 54 号は 2015 年元旦配信をできました。幸い昨年 11 月 27 日、本組織の活動に対して「電友会」から、ボランティア活動表彰を受けました。今回宮村顧問から新春巻頭言の中で祝福の言葉を頂きました。また石井さん、加藤さんの受賞挨拶の言葉を読むにつけ私は本組織の一員として本賞は邁進するための一つの起爆剤として受け取っています。今後とも皆様のご指導をお願いします。
- ・ 「電友会」から本会がボランティア賞を受賞した、ほぼ同じタイミングで、私事 10 月 26 日、通信同窓会から「第 18 回大河内賞」（国際貢献）を受賞しました。受賞理由は電友会表彰とほぼ同じ内容でした。激励賞と受けとめております。
- ・ 田上さんにエッセイ「三文オペラ」を寄稿していただきました。劇、演奏などは、実際観たり聴いたりしないと何とも感想は言えません。何方か本劇を観た方のご意見おねがいします。私は機会を捕え鑑賞したいと思います。
- ・ 今回は紙面の都合で、「現地便り」を割愛しました。次回掲載したいと思います。野村さんの「コロンビア便り」、山下さんの「レソト便り」等があります。 (以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：sv@info.ictov.org/)